
大阪はほんまええところやでえ (オオサカ現象)

オオハタ ユウキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大阪はほんまええとこやでえ （オオサカ現象）

【Nコード】

N5217K

【作者名】

オオハタ ユウキ

【あらすじ】

親の転勤により、東京の高校から大阪の高校へ転入した僕。上手くやれるかな、馴染めるかな、ドキドキ。

住んでいる地域がいくら違っただとしても、同じ日本人なら何の問題も無く過ごせるだろう。外国に行くわけでもないし、その地域の人を何度もテレビで見ている。大丈夫だ。何の問題も無い。

「東京つてめっちゃすごいんやろあ？」

「ちよお、そんなんでおでもええねん。自分らマクドの事マックつて言っんやろ？」

「なあな、標準語喋んのつてしんどない？」

「ちよおお前らうっさいつて。転校生喋られへんやつとるやん」

僕がこれまで生きてきた中で、こんなに囲まれた経験は無かった。机の周りに人だかりができるだけでなく、廊下に面した窓からは、僕を見に来た沢山の生徒の顔で埋め尽くされている。聖徳太子でもあるまいし、こんなに一気に話しかけられても、答える事はできない。それ以前に、答えさせる気が無いのだろうか。朝の朝礼で僕を紹介した若い担任の教師は、それを止めるわけでもなく、隙あらば自分も何か質問してやろうと僕をじっと見ている。

ここへ来たのは間違いだっただろうか？

言ってしまうばよくある話だ。親の仕事の関係で、僕は違う高校へと転入する事になった。高校生ともなれば一人暮らしができるのではないかと父親は言ったのだが、母親は心配なのだろうか僕に何の話もせずに勝手に転入の手続きをしまったのだ。東京から大阪へ。僕は　と言うより東京に住んでいる人は　大阪の事を全然知らない。テレビで見るぐらいの情報しか無い。関西弁というものを喋り、会話は勝手に漫才になり、お笑いにうるさく、料理は薄味。不安はあったけど、離れてしまう東京に対して寂しさは無かった。元々静かな性格だったせいかな、友達と呼べる存在もいなかった。

たし、別に生まれた街に思い出など無い。

一時間目の授業が始まるチャイムが鳴り、僕はようやく質問攻めから開放された。数学の授業。僕は教科書とノートを開き、教師が入ってくるのを待っていた。

「なあなあ、転校生」

隣に座っていた坊主の男子生徒が小声で僕に話しかけてきた。初日から嫌われるのはまずいと、それに答える。

「何？」

「頭ええん？」

「頭、ええ？」

「そう、だから、頭ええのん？」

意味が全くわからない。頭をフル回転させ、坊主の生徒の言葉を翻訳しようとするが、関西弁を知らない僕にそんな事ができるわけもなく、何度も聞き返してしまった。

「だから、賢いん？」

なるほど。頭ええ、という言葉は頭が賢いのか、という言葉のようだ。覚えておこう。英語を日本語に、日本語を英語に翻訳する物は沢山あるけど、方言と標準語を翻訳するソフトや本も出して欲しいと思った。作れば絶対売れると思う。

「まあ、そこそこかな？」

「ほんま？ ほなテストの時見せてな」

カ、カンニングですか……と声を出そうとした瞬間、教師が入ってきた。初老のあまりやる気の無さそうな教師。起立、礼の合図も無く、教卓に立った教師が教科書を開いた。

「なあ先生、今日転校生来とんやで！」

クラスの誰かが大声で言った。その瞬間僕へ大量の視線が降り注いだ。まあ、授業が始まればそれも無くなるだろう。が、違った。

「ほんまかー。どっから来たんや」

言いながら初老の教師は教科書を閉じ、教卓の横に立てかけられ

ていたパイプ椅子を広げ、そこへ座った。仕方なく僕は答える。

「と、東京です」

「おー、東京か。あそこはええとこよなあ」

「え、先生東京行った事あるん？」

「あるわけないやる。テレビで見ただけや」

「なんじゃそれ！」

わはははは、という笑い声が教室に響いた。何の事が全くわからない僕は、シャープペンシルを握り締めたままぼかんとしていた。その間も、教師と生徒の会話は続いていた。

「ほな授業するかあ」

あと十五分で終わるといふ所でようやく授業が始まった。そこで気づいたのだが、僕以外誰も教科書とノートを開いている生徒がない。携帯を触る者、漫画を読む者、mp3プレイヤーで音楽を聞く者、弁当を食べる者……。

「授業なんかええやん、東京の話してもらおうぜ。転校生に」

心の中で思いつき「ええええええ」と叫んだ。こんな大勢の前で何かを喋った経験なんて無いし、別に東京についてどうこうなんというものも無い。じつと何かを待つ視線を浴びながら、ようやくひねり出した言葉が「別に、無いです」だった。

しまった！ 白ける！ 初日から嫌われてしまつともう挽回するチャンスは無い。苛められた経験は無いけど、これはまずいということはわかる。

「別に無いことあらへんやろお」

一人の生徒の声で、またどつと笑いが起きた。

「何やあるやん。東京と言えばあ。八千公とか、秋葉原とか」「メイド喫茶やる！」「そんなん大阪にもあるやん」「ほな何があるねん」「ええ？ せやな……芸能人！」「そんなん大阪にもあるやん」「吉本の芸人ばかりやる」「ほな何があるねん」「そやな、ああ、何でも味噌付けるんやろ？」「それ名古屋やん」……。

いくら待ってもその会話が終わる事は無く、いつの間にか初老の教師はどこかへ消えていた。授業が終わったんだろうか。休み時間になると僕はまた人だかりにもみくちゃにされた。

「なあなあ、芸人で誰が好き？」

「えっ？　さんまとか？」

「普通やな！」

「ちよお、関西弁喋ってみてよ」

「えっ？　儲かりまつか……？」

「ぼちぼちでんなあ！」

わはははは。

「ウチジャニーズの嵐のファンやねんけど、転校生君は会った事ある？」

「えっ？　いや、会った事無いよ」

「俺あるで。ファミレスやろ」

「それデニーズや！　ていうか大阪に全然あらへんやろ！」

わはははは。

「東京の人もお好み焼きにソースかけるん？」

「それ全国や！」

わはははは。

「俺今から標準語喋るわ！」

「イントネーションがもうちゃうねん！」

わはははは。

帰る頃にはへとへとになっていた。学校へ行くだけでこんなに疲れてしまうのだろうか。家に帰ると母親が心配そうな顔で、「どうだった？」と聞いてきたので僕は作り笑いをしながら「めっちゃおもしろかったで！　おかんもはよ馴染めたええな！」と言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5217k/>

大阪はほんまええとこやでえ（オオサカ現象）

2010年10月8日14時30分発行